

第 3 分 科 会

会場 札幌プリンスホテル
3階 「風蓮」

分科会テーマ

「運動部活動における学校と地域社会の連携」

パネリスト

- ◆ 半 澤 宏 樹 山形県 北村山中中学校体育連盟 研究部
東根市立第二中学校

「運動部活動における学校と総合型地域スポーツクラブとの連携」
～山形県北村山地区の陸上競技を通して～

- ◆ 滝 澤 圭 介 長野県中学校体育連盟 研究部委員
信濃町立信濃小中学校

「運動部活動と総合型地域スポーツクラブとの連携」

～上田市真田町と南箕輪村の取組を通して～

指導助言者	(公) 日本中学校体育連盟	副会長	向 井 雄 志
	北海道中学校体育連盟	副会長	村 田 宏 文
司 会 者	北海道大会実行委員会	運営部員	松 島 善 朗
運営責任者	北海道大会実行委員会	運営部員	熊 谷 圭 悟
記 録 者	北海道大会実行委員会	編集部員	田 澤 久 幸

運動部活動における学校と総合型地域スポーツクラブとの連携

～山形県北村山地区の陸上競技を通して～

山形県 北村山中学校体育連盟 研究部
東根市立第二中学校 半澤 宏樹

<提案趣旨>

現在、山形県の一部の地域では、少子化による中学校の統廃合や、教員の競技専門指導者の減少、教員の多忙化など、運動部活動の運営にあたって様々な課題が山積している。

そこで、本研究発表では、陸上競技を通して、運動部活動と総合型地域スポーツクラブ（村山アスレチッククラブ）との連携を進めてきた経緯や現状を把握し、成果や課題を明確にしていくことで、今後の運動部活動と地域スポーツクラブのさらなる活性化と望ましい連携へとつなげていきたいと考え、調査・研究を行った。

1 はじめに

<山形県北村山地区と陸上競技>

北村山地区は、村山市・東根市・尾花沢市・大石田町の3市1町で構成されており、山形県の中央部に位置し、夏は盆地特有で暑さが厳しく、一方で冬は積雪が1～2m程ある気候である。

この地区は、昔から陸上競技が盛んであり、地区中体連としても力を入れてきた歴史がある。山形県中学校陸上界においては、常に数多くの上位入賞を収める強豪地区である。直近5年間を見ても、地区内の中学校が県中総体の男子または女子総合優勝を4度も獲得している。現在の中学生のみならず、親や祖父母の世代から続く、陸上競技強豪地区としてのプライドや伝統が引き継がれている地区といえる。

<村山アスレチッククラブ>（以下村山AC）

①概要

アスリートの育成及び自己記録更新を目標とした「陸上教室」や、スポーツの楽しさを伝える「キッズスポーツ教室」を中心に活動している。特に、陸上教室では、国体やインターハイなどの全国大会や、箱根駅伝に出場した経験を持つ専門のスタッフが指導にあたり、県大会優勝・全国大会出場などの素晴らしい成績を残してきた。また、県内の各種大会にも積極的に参加する他、餅つきや芋煮会などのレクリエーション活動を通じた会員同士の交流も積極的に行っている。会員は、幼稚園児から60歳以上まで幅広い年齢層で構成されており、年齢区分に分けて練習を行っている。指導者は、旧戸沢中学校（*現在、村山市立葉山中学校）の卒業生を中心に、会社員・公務員・カイロプラクティック整体師等の様々な職種の地域住民が活動日に合わせて参加している。また、市の委嘱を受けて、蔵王坊平で毎年開催される山形県市町村対抗ジュニア駅伝に出場する「村山市チーム」を指導するなど、村山市を代表する総合型地域スポーツクラブとしても活動を展開している。

年	特記事項
平成14年	戸沢中学校OBや指導者を中心に「総合型地域スポーツクラブ」として設立
17年	4月に開校した葉山中学校での練習を始める（夏：陸上競技場 冬：体育館）
18年	村山AC所属中学生が棒高跳で全中3位入賞
19年	文部科学大臣表彰「生涯スポーツ優良団体」受賞
27年	村山AC所属中学生がジュニアオリンピックA200m優勝、全中200m7位 棒高跳で全中2位入賞

②練習時間および場所

全天候型グラウンドのある楯岡中学校陸上競技場や室内棒高跳場が設定できる葉山中学校体育館を会場に週2回行われる。時間等は以下の通り。

活動曜日	時間	練習会場
毎週水曜	18:30～19:30	夏：楯岡中
		冬：村山市民体育館
日曜	夏 14:00～16:00	夏：楯岡中
	冬 16:30～18:30	冬：葉山中学校体育館



葉山中学校体育館（室内棒高跳場）



楯岡中学校グラウンド（全天候型400mトラック）

2 活動の成果

○全国、東北大会で活躍する選手たち

<青野朱李> 高校2年

小学校5年生からクラブに参加。小学校6年時、全国小学生交流大会出場。中学時代は、部活動とクラブの練習を両立して更に力をつけ、全国優勝・入賞を果たした。

H29（高2）南東北インターハイ 200m 第1位、100m 第3位
400mR 第6位。

H27（中3）全日本中学校陸上競技選手権大会 200m 第7位
ジュニアオリンピック A200m 第1位
東北中陸上 200m 第1位

<石川星河>高校2年

小学校4年生からクラブに参加。小学校時代から棒高跳をはじめ、中学時代は、部活動とクラブの練習を両立して更に力をつけた。クラブのコーチが、高校の外部コーチを務めていることもあり、週末はアスレチッククラブに参加し、跳躍練習をしながら後輩の指導も行っている。

H28 (高1) 東北高校新人 棒高跳 第1位
H27 (中3) 全日本中学校陸上競技選手権大会
棒高跳 第2位



活動の様子 (冬)

○選手から指導者へ

村山 AC が発足してから15年が経つ。発足当時に中学生だった世代が20代後半になり、指導者として活動するようになった。その裏には、小学生や幼稚園児などの異年齢集団との関わりがあること、仲間同士でも動きを見合ったり、アドバイスし合ったりする雰囲気があることが挙げられる。また、高校、大学や社会人でも陸上競技を続けている選手が、指導者として参加することで、生涯スポーツとして陸上競技に向き合う姿を子供たちに示していることもよい影響を与えている。

3 アンケートからみる実態

参加者および保護者のニーズや実態を把握し、今後のより良い連携の在り方について検討するため、アンケートを行った。質問項目に対する回答は以下の通りである。

<生徒>

- 1 なぜ村山 AC に参加しているのですか？
・競技力向上 ・コーチの専門的指導 ・練習時間の確保 ・練習環境がいい
- 2 村山 AC で活動していてよかったことは何ですか？
・記録が向上した ・個人的にアドバイスをしてもらえる ・友達が増えた
・大会でも励まし合いながら頑張れるようになった ・速い人と走れる
・各種目の専門のコーチがいる ・目標となる先輩ができた
- 3 村山 AC に参加して苦労したこと、大変だったこと
・部活動とのバランス ・練習会の有無の連絡 ・専門のコーチが来なかったとき
- 4 村山 AC に要望はありますか？
・合宿や強化練習をもっとやってほしい

【アンケート結果より】(☆…成果 ▲…課題)

☆日々の活動が記録の向上につながっていると感じる生徒が多い。

☆一緒に活動する仲間と励まし合いながら、試合に臨んでいる。

▲コーチが練習に来られなかったときに戸惑いを感じることもある。

<保護者>

- ① なぜ村山 AC に参加しているのですか？
 - ・競技力向上 ・体力づくり ・コーチの専門的指導 ・練習量確保 ・練習環境
- ② 村山 AC で活動していてよかったことは何ですか？（自由記述）
 - ・より専門的な指導をしてくれる ・部活動では教えられない種目を練習できる
 - ・コーチが協力的 ・いろいろな種目のコーチがいる ・子供が陸上を好きになった
- ③ 村山 AC に参加して苦労したこと、大変だったことは何ですか？（自由記述）
 - ・雨天時の練習の有無の連絡 ・部活動との兼ね合い ・送迎
- ④ 部活動と村山 AC との連携に関して、要望やご意見があれば記入してください。
 - ・部活動の休みが月曜なので、水曜の活動は部活後の移動となり間に合わない。
 - ・コーチの専門的な指導を顧問と共有していただけると嬉しいです。

【アンケート結果より】（☆…成果 ▲…課題）

☆専門的指導を求めて参加させている。

☆子供が陸上競技を好きになってくれてうれしいと感じている。

▲部活動との連携・関わり（指導内容の共有化など）。

4 今後の展望

<陸上カルテ>

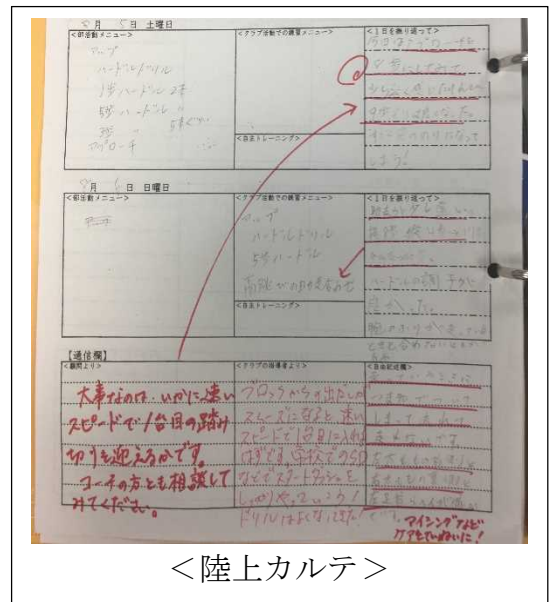
アンケートから見えた課題解決を図り、村山市立楯岡中学校では、従来より行ってきた選手と顧問との「陸上ノート」の取り組みを発展させ、選手・顧問・村山 AC コーチの三者の指導内容の共通理解・感覚や気づきの共有を目的とした「陸上カルテ」の実践を試みた。練習メニューや指導のポイントを共有することにより、選手にとってより効果的な練習を積み重ねることができのではないかと考え、今後継続して取り組んでいく。

<小→中のつながり>

ここ数年、陸上競技を中学校でも継続する生徒が少なくなってきたと感じられる。また、地区内には陸上競技のスポーツ少年団やクラブなどが複数あり、中学校の部活動との連携が課題となっているところもある。以上のような現状が、よい方向に向かうためにも、クラブ（村山 AC 以外のスポ少等も含む）と地区中体連陸上競技専門部との「合同記録会の実施」という案が研究部で出された。今後、各校の実態やニーズに応じて開催を検討しながら研究を続けていく。

5 おわりに

これまでの成果や、活動・連携の実態を振り返ることで、お互いの活動に対する理解や、今後どのように連携することが生徒にとって望ましいのかを考え、共有する第一歩を踏み出すことができたと感じている。また、考察のみにとどまらず、現在実践している取り組みを通して、運動部活動と地域スポーツクラブを含めた地域との連携を更に深めることができると考えている。最後に、アンケートや調査に対して、ご理解とご協力をいただいた村山アスレチッククラブの会員・保護者・指導者の皆さまに心から感謝したい。



<陸上カルテ>

運動部活動と総合型地域スポーツクラブとの連携

～上田市真田町と南箕輪村の取組を通して～

長野県中学校体育連盟研究部
信濃町立信濃小中学校 滝澤 圭介

<提案主旨>

本県では、少子化による生徒数減少をはじめ、生徒・保護者の部活動に対する意識、価値観の多様化による運動部活動への加入率の低下、専門外の指導者（顧問）増加による指導者への負担、競技力向上、さらに本県の地域性や気候条件等による冬期間の活動時間の確保等が課題となっている。その課題を解決し、魅力ある運動部活動を推進していくためには、地域や行政との連携は必要不可欠であり、今回は、本県の中でも地域との連携を特に推進している2地域の活動を取り上げ、研究を深めることで、今後の運動部活動と地域との連携のあり方を模索していきたいと考えている。

<はじめに>

本県は、日本のほぼ中央に位置しており、北アルプスを中心に、3000m級の山々に囲まれている。気候的には、夏は湿度が低く、冷涼なため、スポーツを行う上で適した環境にある。逆に、冬は気温が低く、降雪が多い地域も多く、スキー、スケート等のウィンタースポーツが盛んな地域である。また、地理的には南北に200kmも距離があるため、本県内は、4地区（北信地区、東信地区、中信地区、南信地区）に区分けされ、地域の特色も異なる。さらに、本県は周囲を山々で囲まれているため、冬期間は日照時間が短く、降雪等の影響もあり、部活動が行える時間や場所が限られている。運動部活動を推進していく上で、生徒数の減少等の諸問題以外にも環境面での課題も抱えている本県だが、地域と学校が連携し、工夫を凝らすことで、運動部活動が抱える諸問題を解消し、円滑に運動部活動を行っている地域、学校もある。そこで、本県の2つの地域、学校の具体的な取組を紹介することで、地域の実情に応じた運動部活動のあり方について考えてみたい。

<南箕輪村立信濃中学校とNPO法人南箕輪わくわくクラブとの連携>

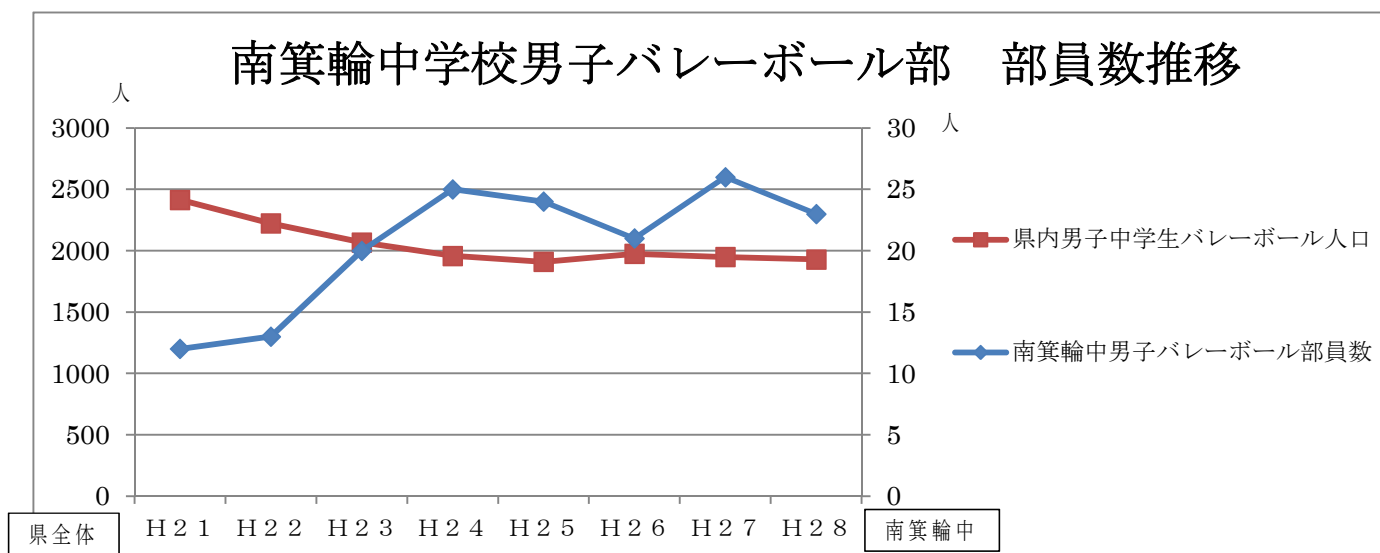
長野県上伊那郡南箕輪村（人口：15,338人）では、村内全域を対象に文部科学省の「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の地域指定を受け、新しい生涯スポーツへの展開と挑戦として、平成14年に総合型地域スポーツクラブ「南箕輪わくわくクラブ」を設立した。学社融合「地域と学校が協力する良さや楽しさ・素晴らしさ」を地域全体で共有

する場として南箕輪わくわくクラブがあり、地域と協力しながら小中学生のスポーツ・カルチャー環境を整え、南箕輪村ならではの地域と学校が連携した部活動を作り上げていくことを目的に取組を推進している。従って、村唯一の中学校である南箕輪中学校（生徒数：453人）の部活動指導方針に従いながら顧問と協力し、部活動が抱える諸問題をわくわくクラブがサポートし、中学生が円滑に部活動を行える環境づくりを大事に考えている。

平成21年、南箕輪中学校の男子バレーボール部への入部者が一人もいない状況を受け、南箕輪わくわくクラブでは、バレーボールを楽しむことを目的にジュニアスクールを開設した。また、平成25年からは、競技力向上を目指し、小学生のクラブチーム（わくわくエース）も開設し、競技人口拡大と競技力向上を並行して取り組んできた。指導は、中学校職員の顧問に加え、南箕輪わくわくクラブのコーチ2名が指導にあたっているため、顧問の人事異動で専門的な指導ができない職員が顧問に就いても技術的な指導を行える体制（※わくわくクラブに登録してある全部活動には外部指導者が配置されている。）である。

また、南箕輪村を活動の拠点としている男子バレーボールチーム、VC長野トライデンツ（Vチャレンジリーグ1部）との交流も行い、バレーボール教室の実施やVリーグの観戦を通して、中学生が目指す姿（ビジョン）を明確にもてるようになってきている。

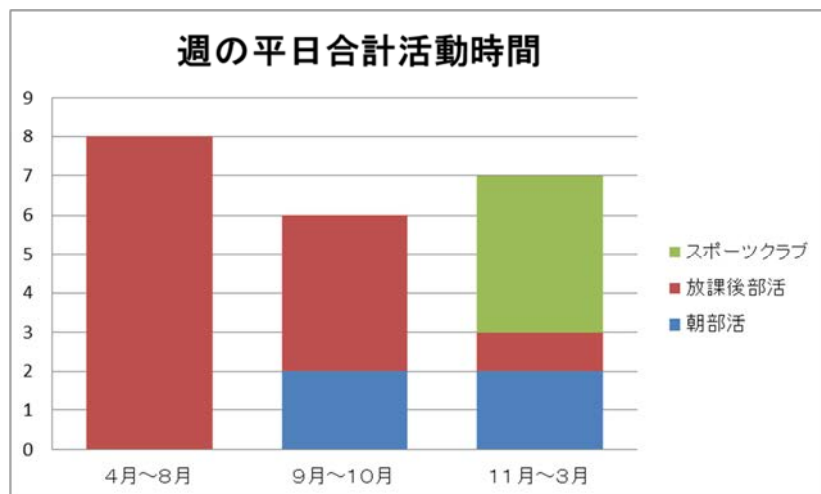
その結果、南箕輪中学校の部活動は、8年前は部員数が少なく、男子バレーボール部の存続も危ぶまれたが、その後、小学生の競技人口も増加し、ここ数年は、長野県全体では部員数が減少傾向にあるにもかかわらず、南箕輪中学校の部員数は増加、競技力も向上してきている。さらに、平成28年度、男子バレーボール部は、創部初の県大会出場を果たすこともできた。



今後の課題としては、他地域、他中学校と同様、生徒や保護者の意識の多様化も出てきており、競技スポーツと生涯スポーツとのバランスがとりにくくなりつつある。また、競技力向上を強く押し進めることで、その方針に馴染めない生徒も少なからずおり、部員数減少につながる恐れも予想され、運動部活動の普及活動に影響が出ることも懸念される。

<上田市立真田中学校とNPO法人さなだスポーツクラブとの連携>

長野県上田市真田町は、山間部（菅平高原の麓）に位置しており、日の入りが早く、登下校の安全確保の為、毎年11月から3月までの間は、下校時刻を短縮した日課（完全下校16時30分）で生活している（※本県の中学校のほとんどが同様の日課）。そのため、冬期間、放課後の部活動



の活動時間が十分に確保されず、多くの生徒や保護者、地域から対策が求められてきた。その中で、真田中学校（生徒数：253人）では、真田町で小中学生のスポーツ、文化活動を支えている「さなだスポーツクラブ（上田市が所管）」と連携を始め、毎年10月末から3月の期間、週2回、17時から19時の2時間というルールを作り、部活動だけでは不足する活動時間を補える体制をさなだスポーツクラブと協力して構築した。真田中学校の体育施設（グラウンドや体育館）が、さなだスポーツクラブの活動施設としても利用できるので、活動場所の心配もない。また、さなだスポーツクラブには専属の指導者がいるが、部活動の顧問もクラブの指導者として登録することができ、クラブの指導者も部活動の外部指導者に登録できるようにしているため、各部の実情に応じて、部活動とクラブの活動を同一の指導者によって一貫指導ができるようになっている。以上の結果、冬期間に練習時間や練習場所が確保でき、年間を通して、適正な活動量の確保、専門的な知識をもった指導者が指導を行える環境が整い、競技力向上にもつながってきている。

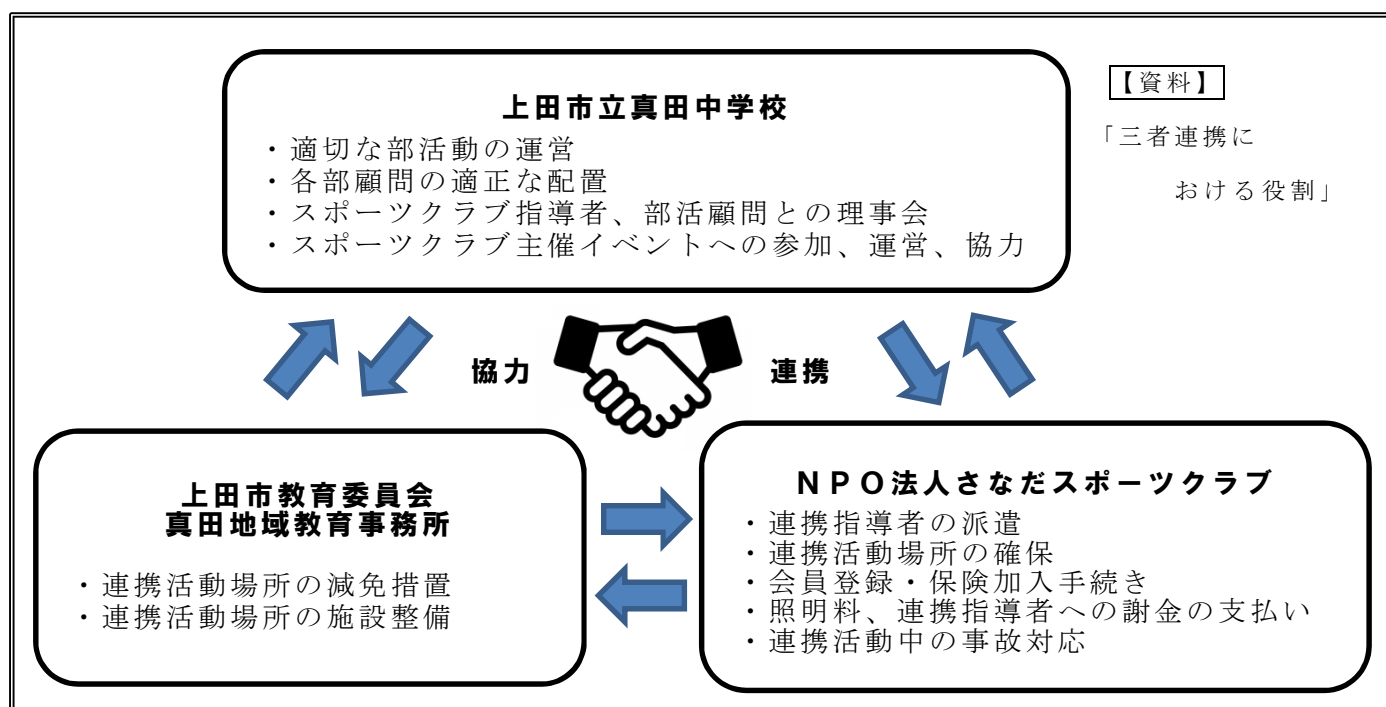
また、少子化に伴う生徒数減少は、真田中学校も同様の傾向にあり、平成18年度には全校生徒数が334名であったが、10年後の平成28年度には全校生徒数が253名と減少してきている。生徒数が減少したために、部活動としての活動が思うようにできなくなった男子バレーボール部（平成27年度）、柔道部（平成28年度）が廃部となった。しかし、生徒や保護者の意識の多様化への配慮もあり、廃部となった運動部でも個人種目で参加可能な場合については、主にさなだスポーツクラブで活動し、中体連の大会への申し込みや大会当日の引率を真田中学校職員が行い、中体連の大会に参加できる体制も整えた。

（※柔道と陸上がこの体制で大会に参加している。）このように日常活動でもさなだスポーツクラブと協力、連携していくことで、より多くの生徒や保護者のニーズに応えられる運動・スポーツ活動の提供にもつながっていると考える。

さらに、小学生が中学校へ進学すると、学習環境の変化や部活動が新たに始まる等、多くの環境的な変化があり、その変化に適応しきれない中1ギャップの生徒も見受けられる。その中でも、真田中学校での課題は、部活動でのギャップが大きかったため、さなだスポ

ーツクラブと連携し、中学校の部活動の顧問（指導者）を小学生の練習に派遣したり、小学生を中学生の部活動へ参加させたりして交流を図っている。サッカー部では、スポーツクラブの指導者に登録した部活動の顧問が小学生の練習に参加し、部活動で行っているトレーニング内容を実施しながら中学校の部活動で必要な力を積極的に伝え、かかわるようにしている。また、12月～2月の中学生のクラブでの活動に卒業前の小学校6年生を招き、一緒に練習したり、中学生が小学生に教えたりしながら子どもたち同士がかかわりながら活動する機会を作っている。このような取組を継続して行うことで、小学生は中学校での部活動に見通しをもち、ギャップを感じることなく、部活動に入部することができている。運動・スポーツ活動の継続率維持にも役立っている。

課題としては、中学校の部活動顧問がスポーツクラブ指導者を兼任していることが多いため、年間通した活動時間の確保や小中連携の推進、一貫指導の面では効果がある一方、部活動顧問への負担増や人事異動における指導者確保の面で課題もある。指導者の負担軽減には、さらに地域に根ざした指導者の確保と部活動顧問との意思疎通、学校と地域を結ぶコーディネーターの役割が重要になってくると感じる。



<まとめ>

今回、研究を深めた2つのスポーツクラブでは、学校、地域との連携により、競技力向上、活動時間、指導者、部員数の確保という面で一定の成果が表れてきている。しかし、長野県は南北に広く、地域による実情も異なるため、総合型地域スポーツクラブが運営されたり、適正な運動部活動を行うことのできる環境が整ったりしていない地域や学校も少なくない。顧問（指導者）の負担減や部員数の減少、競技力向上、部活動継続率など、様々な課題を抱えている学校や地域には、多くの関係者に関わっていただき、成功例を参考にしながら、実情に応じた地域と学校との連携について、更に課題研究を重ねていきたい。